



[駐車場から林道へ](#)



[本堂に通ずる林道](#)

安倍川の支流に藁科川があり、川の透明度が高く清らかな流れということもあってかアユが棲みアユ釣りでも有名な川でもある。その支流に久住川があり、その北側の小高い山の麓にあるのが今回取り上げる洞慶院である。

洞慶院は山を背にして、長い歴史を持つ寺院であり、参道に通ずる両脇には大木も交えて林が連なっている。洞慶院の前には久住川の源流ともいえる沢があって、その沢を渡ると上り坂になり、一番奥まったところにあるのが本堂である。

洞慶院は自然豊かなだけに多くの人にくつろぎや活動の場となっている。観梅から始まって、散歩コースとしても利用され、洞慶院から裏山を経由して安倍城址までの山道は格好のハイキングコースとなっている。



[洞慶院の配置図](#)



[洞慶院の由緒](#)

洞慶院は、福島伊賀守善忠が開基し、恕仲天間(じょちゅうてんぎん)の優れた弟子の一人である石叟(せきそう)円柱(えんちゅう)和尚の開山であると言われている。その前身は、建穂寺の塔頭の一つと言われ、「喜慶庵」を名乗っていた。洞慶院の本尊は千手観音菩薩であるが、この像は石上家が寄進したと言われている。福島伊賀守善忠には子供がなく、石上家の長男の石上兵衛忠告が養子に入り、石上家は次男の石上藤左衛門宗俊が継いでいる。今川氏没落の跡、福島氏は石上姓を名乗り、両家とも石上姓となった。



[広がる梅林](#)



[老梅林園の石碑](#)

境内には約1ヘクタールあるという梅林がある。一般的には梅の開花は1月から2月にかけてであるが、洞慶院の梅の開花は2月に始まり3月になっても多くの花が開いている。これは梅林の位置が山間にあり、

林に囲まれていることに原因があるのではないかと想像される。開花のころは、出店も開いていて、休日を中心にかなりの賑わいをみせている。



[ハイキングコースの表示板](#)

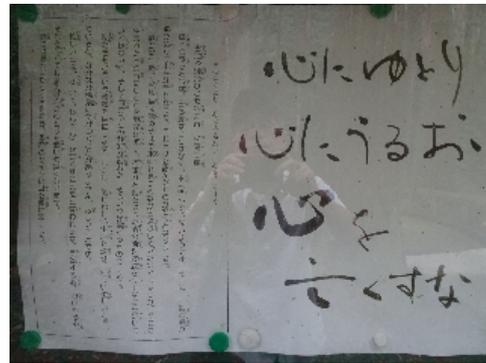


[ハイキングコース入口](#)

洞慶院の北側の峰山の頂上には、戦国時代、福島氏の居城といわれる安倍城があった所として知られている。安倍城址までの道程には、洞慶院の裏山にあたる辺りまでは33の石仏が安置されていて、その先の頂上を峰伝いに行った先に安倍城址は位置していて、低山のハイキングコースとして多くの人々に親しまれ、開かれている。山道は地元の有志が整備してくれていて、その両脇にはスギやヒノキや広葉樹などが茂っていて、日陰が多いことから春秋のシーズンばかりでなく暑い夏でもハイカーの姿をよく見かける。



[本堂前のハス](#)



[心の有りようを示している教訓](#)

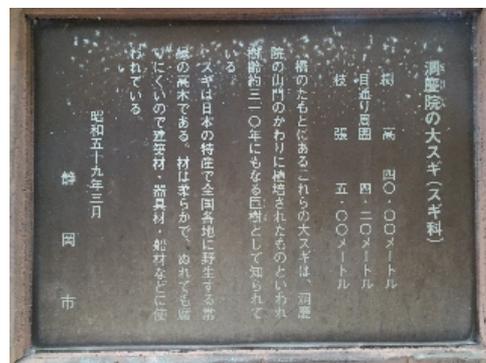
洞慶院は曹洞宗の宗派で、本山は永平寺である。永平寺の場合、僧の最高位の貫首は末寺の優れた住職の中から選ばれた僧侶が務めているが、洞慶院の先代の住職であった丹羽廉芳も平成の頃、永平寺の貫首を務めている。

本堂の前には仏教と関係のあるハスが植栽されている。ハスの花は7月から8月中旬ごろに咲くことが多いけれども、ここでは8月の末になっても咲いている。但し、アサガオと同じで午前中しか咲かず、写真は午後撮っているため残念ながら凋んでいる。

曹洞宗の修行の一つの「禅」は心を静めて精神を集中することにあるそうだが、「心にゆとり 心にうるおい 心を亡くすな」と表現している。



[スギの大木](#)



[大杉についての表示板](#)

洞慶院の境内や周辺の山にはスギが多い。日本の樹木の中では寿命が長く、一番高くなると言われている。本堂に通ずる石段の下に、スギの大木があって、樹高は40メートルと表示されていて、樹齢は350年位のようなのである。



馬鳴大明神の祠



鐘楼

服織と羽鳥は混同されることが多いけれども、昭和20年代末に、この地区が静岡市に併合されるまでは安倍郡服織村羽鳥と称していた。現在は複数の町を総称して、服織学区というように使用している。

この服織に根を下ろしたのが、秦氏であり、養蚕業を興して絹の生産を開始したと伝えられている。秦氏はその産業の神として馬鳴大明神を祀り、馬鳴大菩薩を安置したとも伝えられている。秦氏が聖徳太子の意向を受けて建立したのが京都太秦の広隆寺であり、すぐ近くには蚕ノ社が今も祀られている。歴史研究者であり、教育者でもある足立鍬太郎は、広隆寺の宝物殿に、もと建穂寺にあったものと同じ馬鳴大菩薩が貴重な他の仏像と一緒に保管されているのをガラス戸越しに確認したと、100年近く前に静岡市史や県の史料に執筆している。そのことから、秦氏と服織との関係や建穂寺との関係について結びつきがあると言われていると思われる。

写真の馬鳴大菩薩の祠は、洞慶院の境内に今もあるものであるが、建穂寺の最盛期とされる鎌倉時代に、建穂寺の鎮守として『吾妻鏡』にも登場するなど大きな影響力をもっていた。この小さな祠も見ていると、世の中の栄枯盛衰を強く感ずる。あれやこれや、洞慶院は豊かな自然が包み込んでいる。

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男